

学 界 報 告

[学 会 名]

The 19th European Conference on
Developmental Psychology

[参加セッション名]

Poster Presentation

[発 表 題 目]

①幼稚園児の実行機能が敏捷性と総合的運動能力に及ぼす影響

Influence of executive function on agility and comprehensive physical ability in kindergarteners

②実行機能と自己制御能力向上のための学校ベースのトレーニング：東日本大震災後の小学1年生への介入効果

School-based training for executive function and self-regulation: Effects of an intervention for first graders after the Great East Japan Earthquake

[大会 期 間]

2019年8月29日(木)～

2019年9月1日(日)

[場 所]

アテネ(ギリシャ)

ヨーロッパ発達心理学会(European Conference on Developmental Psychology)は2年に1回、開催され、今年で19回目を迎えた。ほぼ毎回、世界遺産の地で開催されるため、ヨーロッパからだけでなく、

世界中から発達心理学の研究者が集まる。今回は、招待講演が5人、招待シンポジウムが6件、一般のシンポジウムが62件、口頭発表が353件、ポスター発表が349件であった。したがって、参加者数は1000人以上と思われる。実際に、要旨集の索引で氏名を数えると、2200人であった。

演題数が多いため、冊子の要旨集はなく、パソコンやスマホなどで、要旨を検索できるようになっている。内容は、1.注意、学習、記憶、2.生物学的プロセス：神経科学と遺伝学、3.生物学的プロセス：精神生理学、4.認知プロセス、5.発達障害、6.発達精神病理学、7.多様性、公平性、社会的公正、8.教育、学校教育、9.家族の文脈とプロセス、10.健康、成長、障害、11.言語、コミュニケーション、12.方法、歴史、理論、13.道徳的発達、14.子育てと親子関係、15.知覚、感覚、運動、16.予防と介入、17.人種、民族、文化、文脈、18.学校準備/保育、19.社会的認知、20.社会政策、21.社会的関係性、22.社会性、情動、性格、23.テクノロジー、メディアと子どもの発達と、多岐にわたっている。

私はかつてのゼミ生と共に2つの演題を発表した。どちらも、実行機能と呼ばれる、行動や思考をコントロールする認知システムに関する演題である。一つは、東日本大震災後、問題行動が増加している宮城県の小学1年生を対象として、筆者が開発したSocial Thinking & Academic Readiness Training (START) プログラム(医学映像教育センター)を実施した介入研究である。結果は、児童の自己制御能力とワーキングメモリの改善、教師評価による問題行動の

減少、授業中の教師指示に対する反応性の向上であった。さらに、これらの要因の関係性を共分散構造分析で分析したところ、自己制御能力とワーキングメモリが学習成績に影響していることが明らかになった。もう一つの演題は、幼稚園児の実行機能と運動の敏捷性に関する研究である。サッカーやバスケットなどは自分自身のスキルだけでなく、相手に対する瞬時の対応が求められる。このような複雑な運動は、抑制、切り替え、ワーキングメモリから成る実行機能との関連性があることが報告され、最近、注目されている。我々の結果は、幼稚園児において、実行機能の要素である抑制、視空間的ワーキングメモリ、聴覚的ワーキングメモリが敏捷性に影響を及ぼし、その敏捷性の能力が教師評価による包括的な身体能力に影響していることを示した。発表時の様々な研究者とのディスカッションは有意義で、次の研究にもつながるようなヒントも得られ、貴重な体験となった。

発表とともに、多くの研究発表を聞き、情報収集を行った。研究発表は同時にいくつもの会場で並行して行われるため、聞きたい演題をあらかじめ決めておいて、発表会場に直行する。発達心理学会らしい演題をあげるとすれば、乳児の髪の毛から乳児のストレスを測定した研究である。ストレスホルモンとして知られているコルチゾールを乳児の毛髪3cmから定量し、乳児の気質、社会・経済的な環境との関係を調べた研究である。結果は、コルチゾールのレベルは乳児のネガティブ感情気質と、社会・経済的状況の低さに関連しているという報

告であった。私も唾液を採取してコルチゾールの定量を行ったことがあるが、毛髪からというのは驚きであった。発達心理学の研究は、言語で答えることができない乳幼児も対象であるため、研究方法に工夫が必要となる。でもそれは、「そういう方法があったのね!」「へー、面白い!」といった驚嘆と興味に繋がる。これが発達心理学の面白さであり醍醐味といえる。

(松村 京子)